

## 日本の葡萄畑の風景が変わるのか？

マンズワイン (株)

松本信彦

日本はワイン用葡萄栽培には適していないと公言している人が多い。確かに世界の銘醸地と比較し降雨量が多く、湿度があるため、病気に弱いヨーロッパ系葡萄品種は成熟する前に腐ってしまうという事が多かった。日本ではそのため棚仕立栽培が行われてきた。この棚仕立栽培はイタリア南部の生食用葡萄栽培に見られ、その他のワイン産地では垣根栽培が行われている。ワイン用の葡萄は垣根栽培でないといけないと言われている。品質の良いワインを作るため垣根栽培を試みて来たが日本の気候風土に合わず病害や腐敗果になやまされて来た。マンズワインの栽培技術者は長年の研究成果からこれらの欠点を補うマンズレイncut方式(特許申請中)なるものを生み出した。マンズレイncutは、新しい垣根方式に雨よけをつけることで、棚栽培の不利な点を取り除く事が可能になり、ヨーロッパ系品種の健全果収穫も可能にした。

ここにその利点を列挙してみると、

### 1. 作業性が良い

・難しい剪定や新梢整理がないためだれでも葡萄栽培が簡単に出来る。・腐敗果が少ないので収穫や薬剤散布における作業時間の短縮が見込める。・作業しやすい位置に結果するので長時間作業でも疲れにくい。

### 2. 早期収穫が可能

標準収穫量(10a当たり1,500~1,700kg)をあげる成木に生長するのに棚栽培では約7年を要すが、マンズレイncut方式では約4年で同量を収穫出来る。

### 3. 病害から守り健全果が収穫できる。

ビニール被覆を行うことで病果・裂果による腐敗果率を著しく下げ(健全果率:レイncut方式95% レイncut無し45%)ヨーロッパ系品種の葡萄の健全果収穫も可能にした。

### 4. 高品質葡萄を安定して収穫できる。

マンズレイncutの効果により完熟するまで葡萄樹に着果させておけるため、糖度はいうにおよばず、その他の成分も多い葡萄が収穫できる。

マンズレイncut方式の導入により、ようやく日本のワインも世界の品質基準に到達できるようになった。ワイン用葡萄に限らず生食用葡萄、いちじく栽培、キュウイ栽培に適していることが判っているため現在それらについても試験中である。今や日本全国にマンズレイncut方式が取り入れられつつあり日本の葡萄畑が様変わりするのではないかと確信している。最後に、栽培技術指導も同時に行っているので興味のある方は御問い合わせ願いたい。